

第四目 我國ニ於ケル保式魚形水雷採用ニ關スル経緯

既述朱式水雷第一回註文以來(十五年十二月)明治二十年ニ至リ我海軍魚雷ノ將來型式トシテ朱式ガ果シテ適當ナルヤ否ヤニ付疑義ヲ生ゼシモ兵器會議上答ニ依リ其ノ儘經過セシガ爾後ノ調査研究ニ依リ既記上答ヲ覆ヘスノ事實ニ逢會シ茲ニ明治二十五年三月十七日海軍大臣ヨリ海軍技術會議々々長宛左記第一號ノ諮問議案ヲ下付スルニ至レリ之ニ對スル答申上申等第二號ノ如シ

第一號

二三九

去明治二十年一月、「ベルダン」氏提出ノ意見ニ基キ第一、水雷發射管ヲ高所ニ設置シ水雷ヲ舷側ヨリ成ルベク遠距離ニ投射スルノ利害、第二、上記第一ノ目的ニ對シテハ本邦現用ノモノヨリハ保式水雷ヲ適當トスルノ可否舊兵器會議ニ於テ審議ノ末、第一項ハ原案ノ通可決シ第二項ハ朱社ヨリノ來狀ニ信ヲ置キ強固ニ製造シタル朱式ヲ採用スルコトニ決シ其ノ旨上答ニ付朱社ニ命ジ該水雷ヲ新製セシメ第一項議決ノ目的ヲ以テ發射試驗ヲ施行セシメタルニ好結果ヲ得ズ且朱社申出書ニ依ルモ強固ニ製造スルヲ得ザルヤ明確ナリ即チ朱式ハ高所ヨリノ發射ニ不適當ト思惟スルノミナラズ不素ノ取扱ニ於テモ強固ナラザル方ニ依リ爾今新造ノ艦船ニハ保式ヲ採用スル方適當ト認ムルニ付左記議案ヲ下附候條其ノ會議ニ於テ審議ノ上何分ノ意見具申スベシ(官房第六〇五號)

議案

朱式水雷ハ高所ノ發射管ニ使用スルニ適セザルノミナラズ不素ノ取扱上ニ於テモ強固ナラザル方ニ付自今新造スベキ艦船ニハ保式水雷ヲ採用スルノ可否

明治二十五年三月十七日

海軍技術會議々長宛

海軍大臣

第二號

保式水雷採用試驗致度儀上申

過般官房第六〇五號ヲ以テ御下附相成候保式水雷採用云々ノ議案ニ付審議候處別紙甲ノ通決議致候儀依テ調査委員ヲ設ケ其ノ研究方
法取調候處別紙乙ノ通委員會ニ於テ議決候ニ付水雷十二個御渡シノ上委員見込ノ通試驗執行方御認許相成度此段上申候也

明治二十五年七月十八日

海軍大臣 子爵 樺山資紀 殿

海軍技術會議々長 相 浦 紀 道

(甲)

明治二十五年七月八日開會

技術議 甲 第十二號 決議要領

原 案

一、朱式水雷ハ高所ノ發射管ニ使用スルニ適セザルノミナラズ平常ノ取扱上ニ於テ強固ナラザル方ニ付自今新造スベキ艦船ニハ保式水雷ヲ採用スルノ可否

決 議

保式水雷ハ我海軍ニ於テ實驗ニ乏シキガ爲今後研究ノ上採否ヲ議決スルコト

右決議ス

(乙)

保 式 水 雷 調 査 委 員 會 決 議

一、十四吋保式魚形水雷十二個ヲ取寄セ實地試驗ヲ施スコト

但最新式ニシテ三米ノ高所ヨリ水平ニ發射スルモ故障無キモノヲ要ス

二、發射管ハ陸上及艦内發射ノモノトモ實地試驗施行迄ニ差支無キ樣準備スベキコト

右決議ス

明治二十五年七月十三日

以上技術會議々長上申ヲ審議ノ結果至極適當ノ主旨ト認ムルモ差當リ保式水雷ヲ新規購入スベキ豫算無ク困却シ他方目下英國安社ニテ製造中ノ甲號巡洋艦(吉野)ハ最早水雷發射管ノ製造ニ着手スベキ期ニ達シ何式水雷ヲ採用スベキヤニ付數回監督官ヨリ伺出アルモ今回ノ議案決議ノ上ナラデハ何レトモ確定出來ザル義ニ付該艦發射管ハ保式水雷ノ長サニ適スベキ樣製造シ(保式水雷ハ其ノ直徑ハ已採用

ノ朱式水雷ト同様ナレドモ長サハ三八〇耗長キヲ以テ保式ノ方ニ從ヒ置クトキハ朱式水雷ヲモ發射スルコトヲ得又將來保式ヲ採用スルニ至リテモ支障無キ見込）水雷ハ矢張朱式ヲ採用シ是迄購入ノ同水雷ノ内ヨリ差繰リ搭載スルコトトシ該巡洋艦ニ對スル兵器費ヲ以テ試驗用保式水雷ヲ購入スルトキハ彼是好都合ト認メ明治二十五年八月八日技術會議々長宛「保式水雷採用試驗施行ノ件認許ス、但保式水雷ハ購入ノ上渡ス」旨指令ス

斯クテ明治二十六年三月英國保社ニ對シ不取敢保式魚雷十二個ノ註文條約ヲ締結スルニ至レリ然ルニ當時恰モ我海軍ニ於テ多數艦艇ノ建造中及建造ニ着手セントスルモノアリ之等ニ供用スベキ魚雷註文ノ急ニ迫ラレ居リシ爲當局ハ熟慮ノ結果左記主旨ノ仰裁ヲ爲シ二十六年五月未決裁實行セララルニ至レリ蓋シ一大英斷タリキ

註文起業中ノ艦艇ニ保式水雷採用ノ件

保式水雷採用方ノ儀ニ付之ニ要スル實驗用水雷ハ已ニ保社へ註文テナシ來ル十月ニハ落成ノ上軍艦吉野へ搭載シ本邦へ回航ノコトニ相成居候故同水雷ノ到達ハ遅クモ本年度末ニシテ實驗ハ來年度ニ至リ着手ノ都合ト可相成ト存候然ルニ二十四年度起業乙號巡洋艦水雷艦及水雷艇並ニ二十六年度起業丙號巡洋艦及乙號報知艦ニ搭載ヲ要スル魚雷ハ何レモ本年度中ニ註文ヲ要スルモノニシテ前記實驗ノ結果ヲ俟ツチ得ズ抑モ魚形水雷ノ儀ハ日下歐洲諸海軍國ニ於テ保朱兩種ノ内何レチ多ク採用スルヤト謂フニ英佛露埃伊ノ五國ヲ始メ丁蘭瑞那葡等ノ諸國ニ於テ何レモ保式ヲ採用シ朱式ハ唯僅カニ獨西土ノ數箇國ニ於テ使用スルニ過ギズ由是觀之假令我海軍ニ於テ當初朱式ヲ是トシテ採用セラレシモ其ノ當時即チ明治十五年ト今日トハ已ニ十箇年餘ヲ經過シ當時朱式ヲ優ルトセル諸點モ今日ニ於テハ却ツテ保式ヲ優レリト云ハザルベカラズ且現ニ保式ノ朱式ニ優レルハ第一、堅固ニ製造シ得ルト代價ノ低廉ナル

トニ在リ今其ノ代價ヲ比較センニ前記本年度ニ注文スベキ水雷五十五個ヲ以テ算スルトキハ朱式ニアリテハ一個三三三圓餘トナリ保式三〇八〇圓餘ナルニツキ其ノ差二八三圓餘ニシテ即チ保式ハ朱式ヨリ廉ナルコト總計金一萬五千五百六十五圓ナリ故ニ假令我海軍ニ經驗無キニセヨ各國ノ意向ノ傾クトコロニ依リ察スルモ保式ノ朱式ニ優レルノ較著ナルヲ想像シ得ベキノミナラズ現ニ前記ノ如キ利益アルヲ確認スルニ於テハ之ガ採否ヲ決スルニ左ノミ躊躇スベキニアラズト存候又之ガ前例ヲ求ムルトキハ我海軍ニ速射砲採用ノ場合ノ經緯ニ於テモ然リシガ如ク強チ我自身ニ經驗無キモノハ信用シ難シト云フヲ得ズ

右理由ニ依リ海軍一般ニ採用スルコトハ技術會議ノ議決ニ譲リ日下差返リタル分即チ前記各艦艇ニ要スルモノニ限り保式水雷ヲ註文致度仰高裁(二十六年五月二十五日決裁濟)

軍艦吉野ハ明治二十七年三月着邦シ同年ヨリ翌二十八年ニ互リ長浦ニ於テ數次ノ實驗發射ヲ行ヒ其ノ成績良好ナルヲ認メ得タル結果終ニ明治二十八年十二月ヲ以テ自今海軍用トシテ保式水雷ヲ採用スルコトニ一決セリ關係仰裁書及海軍技術會議々々長ノ保式水雷採否議決上答書等左ノ如シ蓋シ我海軍ニ於ケル魚雷兵器ノ選擇ニ關スル劃期的事象ナリ而シテ爾後我國ニ於ケル造兵術ノ進歩ニ伴ヒ今ヤ今日ニ及ンデハ我獨創的考案ニ就ル優秀魚雷ヲ見ルニ至リシガ而カモ其ノ機構工作ノ眞髓ニ至リテハ依然保式ノ血縁ニ終始セルモノナルハ多言ヲ要セズ

一、保式水雷

右我海軍ニ採用ノ件別紙ノ通技術會議々々長ヨリ上答相成候ニ就テハ自今海軍用トシテ採用相成度此段仰高裁候也(明治二十八年

十二月)

(附記)

本文御決裁ノ上ハ從來ノ艦船其ノ他水雷艇ニ於テ使用上差支無キ分ニ限り朱式水雷ヲ混用可致候事
右ニ依リ同月九日決裁セリ

(別紙)

保式水雷探否議案上答

去ル明治二十五年三月十七日官房第六〇五號ヲ以テ保式水雷採用ノ可否議案御下附相成候ニ付調査ノ末審議候處自今新造スベキ艦
船ニハ保式水雷ヲ採用スベキコトニ決議候條別紙決議要領及長浦兵器工場實驗成績相添此段上答候也

明治二十八年十二月六日

海軍技術會議々長 東 郷 平 八 郎

海軍大臣伯爵西郷從道殿

〔別紙〕

技會議第一二號保式水雷探否ノ件明治二十八年十二月五日開會決議要領

議 題

一、本議案ニ對シ明治二十五年七月八日當時ノ議員ハ左ノ決議ヲ爲セリ

保式水雷ハ我海軍ニ於テ實驗ニ乏シキガ爲今後保式水雷ヲ研究ノ上探否ヲ議決スルコト

右ノ決議ニ基キ明治二十八年九月二十四日實驗成績ニ依リ調査委員ハ左ノ決議ヲ爲セリ

從來ノ結果ニ依レバ保式水雷ハ其構造強固ニシテ價格廉直ナリ且其命中ノ點ニ於テ朱式水雷ト大差無キヲ以テ自今保式水雷ヲ

採用スル方然ルベシ

但シ實驗成績ハ長浦兵器工場ニ於テ施行セシモノニ依ル

依テ本議案ノ可否

保式水雷ヲ採用スルコトニ可決ス
決 議